



再びの旅 I (スペイン～ポーランド) 林 保明



鉄道の旅は好きだ。ヨーロッパの駅は面白いし、車窓からの景色を見ていると、世界は美しいと思う。それに国際列車が走る線路の続く先には、夢がいっぱいあるような気がするのだ。陸続きのヨーロッパは、鉄道を使えばどこにでも行ける。時間さえかければアジアに行くことも可能だ。

新型コロナの流行がなければ、70歳を機に仕事を辞め、ヨーロッパを陸路で西から東へ旅するつもりだった。しかし未曾有のパンデミック!「5年位すれば行けるだろう」と考え、仕方なく過去に撮ったフィルムをスキャンしながら、印象深い駅を中心に思い出を辿って行った。

スペイン、イギリス、フランス、ベルギー、ドイツ、イタリア、ポーランド……、しかし夢はここで潰えてしまう。まさかウクライナとロシアで戦争が起こるとは!!



スターリンの贈り物、文化科学宮殿と遊園地の観覧車（1994年8月、ワルシャワ）

表紙写真上：バルセロナ（1991年12月）、下：メリダのローマ橋（1997年8月）

初めての海外旅行はスペインだった。1991年の暮れ、8日間をかけてスペイン全土を回るバスツアーで、マドリッドからセビリアまでは特急列車に乗った。バルセロナに着陸するときに機内から俯瞰したヨーロッパの重厚な町並みに感動した。

マドリッド・アトチャー駅

広大なターミナル駅のプラットホームを、初めて見たのがアトチャー駅だった。その時はツアーなので駅での自由時間は殆ど無かったが、2007年仕事で再訪した時、駅は新しくなり旧駅は植物園風の憩いの場になっていた。



植物が生き茂るアトチャー駅（2007年6月、マドリッド）



3 池には何故かジェット機の残骸が落ちていた。（2007年6月、マドリッド）



低いプラットフォームには古い電気機関車が止まっていた。(2008年6月、マドリッド)



アランフェス行き観光列車 (2008年6月、マドリッド)



鉄骨の橋にぶら下がる世界最古の運搬橋ビスカヤ橋（2008年7月、ビルバオ）



5 フランス国境近く、スペイン内戦で無差別爆撃に遭ったゲルニカ。（2008年7月）

パリ・サン＝ラザール駅

モネの絵で有名な駅、ノルマンディー地方の主要都市に向かう長距離列車が出ている。朝夕の時間帯は通勤客が多く、周辺の下町にも活気があった。



ここでも古い電気機関車が活躍していた。(2008年7月、パリ)



三角屋根のサン＝ラザール駅 (2008年7月、パリ)



芸術の都パリには見所がたくさんある。エッフェル塔・オペラ座・シャンゼリゼ…、しかし、ただ街を歩いているだけでも、芸術の香りには事欠かない。地下鉄に乗ってみる。駅の出入り口がすでに芸術でアール・ヌーヴォーの建築家エクトール・ギマルがデザインしたそうだ。電車に乗るとどこからともなくジャズの音が聞こえてくる。



地下鉄サン＝ラザール駅（2008年7月、パリ）



夜遅くまで賑わう下町のカフェ（1992年10月、パリ）



1900年から走るパリの地下鉄（1992年10月、パリ）



9 ドアが開くとクールジャズが……（1992年10月、パリ）



夕暮れのエッフェル塔（1992年10月、パリ）



『ミラボー橋の下を、セーヌが流れる』と歌われた雨のミラボー橋（2008年6月、パリ）

ライブチヒ中央駅

ドイツの駅は面白い。まるで一つの街のように何でもある。自転車が走り、犬も散歩している。

この駅に始めてきた時、コンコースを車が走っていたのが衝撃だった！（展示用の4WD だったけど？） そう言えば、ドイツの自販機には犬の切符を売っているし、集合住宅には、犬用のトイレ？も置いてあった。



ライプチヒ中央駅（2010年8月、ライプチヒ）



11 ホームにも車内にも大型犬を良く見る。（2010年8月、ライプチヒ）



犬は子供と同じ料金、右は犬用のトイレ（2010年8月、ベルリン）



ドイツの駅には改札が無く自動販売機が置いてあるだけ（2010年8月、ライプチヒ） 12



2階建て近郊列車Sバーン（2010年8月、ライプチヒ）





家族の帰りを待つ犬の後ろ姿に哀愁を感じるのは何故だろう？

ワルシャワ中央駅

今年の3月、ウクライナ難民の避難所となったポーランド・ワルシャワ中央駅。

1994年の8月、この駅には、モスクワからプラハへの直通列車が到着していた。民主化5年目の街中はまだ混沌としていたけど、市内のあちこちに新しい店があり活気に溢れていた。(近代的な装いのマクドナルドの前には長い行列が出来ていた。)人々でごった返すフリーマーケットをうろつき、駅のホームで発車風景を撮って居たら、ロシアのおばちゃんに投げキスをされてしまった！



高層ビルが無い時代、文化科学宮殿はどこからでも見える。(1994年8月、ワルシャワ)





夜行列車の窓からオバちゃんが…… (1994年8月、ワルシャワ)



モスクワ発プラハ行きの夜行列車 (1994年8月、ワルシャワ)





ポーランド軍事博物館 (1994年8月、ワルシャワ)



ポーランド軍事博物館 (1994年8月、ワルシャワ)

駅には出会いがあり別れがあり、物語と庶民の生活がある。人々の喜びと悲しみの記憶がある。そして鉄道にも暗い過去や歴史がある。

ウクライナには行ったことがないけれど、ロシアには2011年に1度行き、ポーランドには1994年、96年、2009年と3回行った。この国には昔から興味があり、初めて1人で旅したヨーロッパの国はポーランドだった。

それは戦争の歴史に興味があったからだ。高校生のとき『夜と霧』（ヴィクトール・E・フランクル）と言う本を読んで、「人間はどこまで残酷になれるのだろうか？」と言う疑問を持った。それから半世紀以上経った今、毎日繰り返されるロシア・ウクライナの戦争報道を見ながら、同じ思いを感じている。

歴史には学ぶことが沢山あるのに、なぜ人間は歴史に学ぼうとしないのだろうか？

戦争なんて所詮、一部の政治家と武器製造に係わる大企業を潤すしかないと思うのだけれど・・・、軍備費と言う税金を払う民衆は、何時の世にも消耗品でしか無い。

折しも来年4月、G7サミットが広島で開催されるという。ウクライナの戦火はどんなになっているのだろうか？ 今はただ悲劇が繰り返されない事を願うのみだ



市内中心部の交差点（1994年8月、ワルシャワ）

ウクライナからの非難民がポーランドに3百万人以上入り、最盛期は1日20万人が国境を越えて来た。

しかも、各家庭の住人が自宅に来るようにと、国境の非難所まで迎えに行ったそうだ。日本では考えられない話だと思った。同じ様に悲惨な戦争を経験しても、この違いは何なのだろう？

人口3800万人ほどの平原の国の歴史は正に戦争の歴史であり、生半可な知識や学問では理解できない位複雑なのだろう。この地をヨーロッパの十字路と言うそうだ。



ビルケナウ (1994年9月、ポーランド)

ドイツ周辺の国から鉄道を使って、ここにユダヤ人達が貨車で運ばれてきた。暗い歴史がまた繰り返されるのか？ (以下、来年に続く……)